『グローカル天理』第１号（通巻 25 号）掲載論文要旨

井上昭夫　「巻頭言　「内蔵」の黙示的解釈」

昨年は、お屋敷に「内蔵」が竣工してから 120 年目に当たり、また、教祖が現身を隠された直後、飯降伊蔵を通し「内蔵」で神言を伺われてから 115 年目でもあった。天理教は立教・年祭とも「内蔵」から 始まっている。このことは何を意味しているのか。教祖の御行いは、断食であれ、施しであれ、言葉によっていちいちその理由を説明されていない。ひながたの 道の出発点であった「内蔵」も、黙示的行為としてあった。その黙示の何たるかを理解し、解釈するのは、私たち信仰者にとって大切な仕事である。

荒川善廣　「元の理」の探究（10）―人間と存在［１］

生命の特徴と考えられる自己享受(self-enjoyment)、創造的活動性(creative activity)および目的(aim)は、程度の違いはあるが、無機界（無機的自然界）にも見られる特徴である。つまり、これら三つの特徴は、狭義の生 命体だけでなく、非生命体にもそなわっている特徴である。 現実に存在するものは、多かれ少なかれそれらの特徴をそなえているので、有機体(organism)とみなされる。親神によって創造されたものにはすべて 十全の守護の理が込められているので、最初に産みおろされたものはＤＮＡをもって自己増殖していく生物ではなく、宇宙の始まりを示す出来事としての有機体 である。

北詰洋一　「紛争回避のテクノロジー（９）同時多発テロ、ゲームの理論、生物進化論」

昨年秋の同時多発テロは解決されぬまま越年してしまった。最新兵器で武装した米軍 を中心に多国籍軍が出動して犯人探しをいるが、再発防止の手段も考えられぬままである。再発防止を考える発想として、今回は「ゲームの理論」と「進化論」 「抗生物質の効用」を取り上げてみた。いずれも再発防止に直接は結び付かないが、考える材料になるのではないかと思う。

末延岑生　「ことばと教育（10）?ことばの元を探る［10］」

地球上の大自然とその営みのなかにあって、人間はそれらをどのように受け止 め、どのように生きるべきかを、私は以下のような五つの時期に分類してみた。第一期は純粋な無感動の時代。これは動物的生き方である。第二期は大自然とそ の営みに対する「恐れ、感動、感激」の時期である。第三期は自然の恵みを受けることに対する喜びに浸る時期である。しかし、そうした喜びの当然行き着くと ころは、第四期の「感謝」の時期があらねばならない。この時期こそ、人間のみが、理性を通じて、帰納的に感じる感謝の時期である。第五期は「報恩」の時 期。ここに理性の具現者としての本来の人間の姿がある。

天理の教えによると、この世は神のからだに例えられると教えられ、世界は「火」・「水」・「風」・「種」・「苗代」・「つっぱり」・「つなぎ」・「水気上げ下げ」・「引き出し」・「切る」、の十全の守護の働きによって成立して いるという。人間のからだも、「借り物」であるとされ、十全の守護によって生かされている。では、親神は（１）人間にどんな道具を貸し、その貸しものの中 身は何だろうか。そしてまたどんな働きを貸しているのだろうか。（２）どんな目的のために貸したのだろうか。（３）仕込みのしかた、借りる条件、代償は何 か。（４）借りた人間はどのように使っているのだろうか。まず、（１）について述べる。

人間を含め生物は細胞からできており、その一つ一つが十全の守護によって生きて働いており、驚くべきことには各々の細胞は互いにコミュニケーションを取り合っていることである。

金子　昭　「天理経営学ーその歴史・哲学・展望ー（18）　教学編　天理経営学とは［３］ワークシェアリング―新しい「働き」の時代」

最近の雇用情勢の厳しさ打開の策として、ワークシェアリングの導入が我が国でも進んでいる。それは、正社員の間だけで実施されるものでは なく、非常勤やパートタイマーや派遣労働者にも及ぼすことが可能であり、またそのようにならなければならない。ワークシェアリングという形の労働者間の 「痛み分け」や「たすけ合い」は、天理教の「互い立て合いたすけ合い」の教えの具現化とも合致する。

小滝　透　「天理比較神秘論への試み（25）修行論［１］」

人が絶対者に近づく折の修行論について述べてみた。これは、日本の文化的伝統では稽古と呼ばれるものに含まれ、心身一如の言葉によって示される段階を目指すものとしてある。今回は禅の中に見られる修行（坐禅と公案）を取り上げ、それを中心に検討してみた次第である。

小林正佳　「芸術・癒し・宗教（25）繋がりの体験」

コミュニケーションの網の目に自らを投じる積極的な意思の働きは、現に自分の存在 が外側の世界に働きかけているという実際の出来事を通して自分の力を発見してゆくことによってもたらされる。この論考で考えている「癒し」の対象は、多く の場合、世界と自分とのあいだにそうした関係を発見することができなかったこと、従って、自己の力を発見し自己の存在そのものに自信を得るという出来事を 体験できなかったことによって生じる困難を抱えた人間であるといってよい。とすれば、「癒し」は、改めてそうした「関係」の中に身をおくこと、あるいは、 現にそうした関係の中に身をおいているはずの自分自身を発見し直すことを通して実現されるだろう。このことに、芸術は、あるいは､踊ることは、どのように 貢献できるのか。特にここでは、民俗舞踊を踊ることが、どのような「関係」の体験をもたらすことになるのか。

金子珠理　「ジェンダー女性学情報（23）　生殖技術とジェンダー［１］

有数の福祉国家スウェーデンにおいて第二次世界大戦をはさんだ約40年間にひそかに６万人の男女に対し強制不妊手術が行われていたという事実は世界を震撼させた。この不妊法にみられるジェンダーについて考察する。

塩澤千秋　「脳死・臓器移植―カナダ通信（20）医学研究の行方［４］」

一見、胚性幹細胞の医療への利用は大きな利益があるように見えるが技術的にも解決し難い問題がある。また倫理的には一つの命のために他の命を犠牲にすると言う矛盾を孕む医学研究の方向である。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る（12）」
山本義泰　天理柔道の伝統と精神［２］

　これまで多くの人々が天理柔道精神について語ってきたが、その多くは正しく正確かつ妥当なものだったと思われる。特に、雑誌『柔道』の 1956 年８月号に掲載された二代真柱様のインタビュー記事の中に天理柔道の要点が概説されているが、そこに天理柔道精神が最もよく現れている。